MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．１１．１６　発行元
第 417 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

歴史・時代ミステリその7

第４０７号に続いて「歴史・時代ミステリ」の第７弾。そろそろ前に取り上げた作家の別の作品の登場を願うかとも考えたのだが、まあなんとか、取り上げていなかった作家のものを並べることができた。

今も歴史は動いている

私たちが生きている今現在も「歴史」は動き続けている。新型コロナウィルスによる社会への大打撃も歴史に残るもの。そして、これを書いている１０月１０日にはロシアによるウクライナ侵攻の中で、ミサイル攻撃がウクライナ全域に行われている。２月に始まって以来ずっと戦闘が続いている。先の見通しがまったく立たない中で、今後の状況が心配される。これもまた歴史の中の大きな出来事と言えるだろう。

これらもこれから書かれるだろうミステリの中に反映されていくことになる。客観的な事実が集められ、正確な記録が残されていくことが重要である。ミステリはその土台の上に構築される物語なのだから。表に出ているニュースの裏にはたくさんの隠れた駆け引きやスパイ戦などもあるのだろうと思う。人物像もいろんな角度から見た描き方ができるのだろうと思う。

高木彬光の作品からは義経絡みの『成吉思汗の秘密』を書こうと思ったのだが、私の本棚から探し出せなかった。角川文庫版だったように思うが…。市内の６つの図書館にも置いていなかった。それで『古代天皇の秘密』になってしまった。

汀こるもの「探偵は御簾の中」

２０２０年講談社タイガ。シリーズ一冊目。『検非違使と奥様の平安事件簿』の副題がついている。現在まで３冊刊行されている。平安時代の『源氏物語』をミステリ版にしたようなもの。出だしはバラバラ死体事件、密室の中の首吊りに見せ掛けた事件…とミステリらしい設定がしてあるが、最後の方はラブコメそのものになってしまう。検非違使の長になる夫・祐高だが、全てにわたって軟弱。後から必死に支えるのが名探偵役の妻・忍。ミステリの謎解きよりも二人の人間関係がストーリーの中心。周りの登場人物が位の表現だったり役職名だったりするので、途中までは読んでいて区別するのに四苦八苦。とても「読みやすい」とは言えないなぁ。

高木彬光『古代天皇の秘密』

１９８６年角川ノベルス。高木彬光の歴史ミステリは１９５８年の『成吉思汗の秘密』、１９７３年の『邪馬台国の秘密』と本書とで３冊ある。いずれも病床での頭脳訓練のような形で、古代の歴史の謎を分析し、推理を加えていく形になっている。これはジョセフィン・テイの『時の娘』の例に倣ったもので、過去の歴史に推理作家らしい発想を付け加えていく作業である。奇抜で強引な展開部分はあるものの、フィクションとして読めばそれなりに興味を魅かれる。

名探偵・神津恭介は交通事故にあってしまう。病院に入院。親友で捜査のパートナーを勤めてきた松下研三がお見舞いに行く。そして『邪馬台国の秘密』に続く時代の考察に再度挑んでいく流れになる。『古事記』と『日本書紀』の記述から始まり、神武東征の話、そして邪馬台国の位置の再確認、九州勢力と大和の関係などと進んでいく。後半は隼人・熊襲、蝦夷、出雲族、ナガスネヒコ…と各地に散らばる勢力の話にもなっていく。地名に関わる推論が多い。本書が書かれてからかなりの年月が流れており、今読めば歴史学の学問上の研究では大きく違う部分も出てきているように思う。日本古代史にはまだまだ解明すべき謎は多いと思う。

獅子宮敏彦『豊臣探偵奇譚』

昨年５月にハヤカワ文庫ＪＡから出た本。作者の獅子宮敏彦は１０年ほど前から作品を発表しているようだが、あまり話題に上がることは少なかった。

本書は豊臣秀吉の甥にあたる豊臣秀保を主人公に据えた物語。秀吉の姉・ともの子で、豊臣秀次の末弟になる。秀吉の弟・大和大納言秀長の養子となり、１３歳で大和百万石の跡を継いだ。歴史的な資料に記述は少なく、１７歳で没したことになっている。本書の中では戦いを好まず、若いながらも知力で必死に努力する姿で描かれている。芸能集団・平城散座の座頭・平城日魅火という若い娘が大きな役割を担っている。４つの話の連作形式になっており、歴史の流れに沿って印象的に展開していく。第一話は領主として奈良入りする場面で、東大寺大仏の再建を夢に描く話。第二話は秀吉の朝鮮出兵にともなって、九州の名護屋に進軍した時の話。密室で殺人事件が起きる。第三話はお拾が生まれて、秀吉に疎んじられつつある秀次との連携にかかわる話。第四話は、秀保が亡くなったとされる吉野への逃避行の話だが、ここから急激に予想外の方向に拡がっていく。実は亡くなっていたはずの〇〇が登場して…。フィクションとしての面白さ全開といったところか。